

# 福島希望の光

# 水中ロボ復興の力

## 地元企業 最新技術磨く

東日本大震災と福島第1原発事故から10年を迎え、浜通りの被災地には新しい希望の光が産まれています。南相馬市と浪

江町にできた「ロボット・テストフィールド」です。最新のロボット研究が行われており、参入する南相馬市の企業・タカワ精

密は、廃炉作業に役立てるため、水中ロボット「ラドほたるII改」の開発を進めています。同社は1980年(昭

和55年)に創業、現在社員数は38名です。スマートフォンなどの部品を作る機械などを生産をしています。水中ロボットの開発は2013年(平成25年)に複数の企業と合同で始めました。

取締役の渡辺光貴さん(39)によると、ラドほたるは筒状で重さは約7キ

ロ。七つのカメラ(内部の放射線用を含む)を備えた有線で動かす水中ロボットです。累積最大1万シールドの放射線まで耐え、映像などを撮影できます。廃炉の現場で活躍が期待されています。渡辺さんは「完成したら、2022年度にも福島第1原発で役立てたい」と話してくれました。

渡辺さんは屋内水槽実験棟の中の水槽で、ラドほたるの実際の動きを見せてくれました。コードにつながれたラドほたるが水槽の中に入れられると、操縦はゲームにも使われるコントローラーで行います。初めて操作する私たち取材班でも上手に上下左右に動かすことができました。体験を通

題字「福島希望の光」は、4人が意見を出し合って決めました。「福島」「未来」「希望」が共通のキーワードとして浮かびました。4人全員で題字に福島の輝く未来を託そうと「福島希望の光」と決めました。



▲「ラドほたるII改」に実際に触れたり、持ち上げたりすることができました。

## 災害から町の人を守る

株式会社タカワ精密  
渡辺光貴さん

▲南相馬市をロボットの街にしたいと語る渡辺さん

今回講師をしていたタカワ精密の渡辺光貴さんが取材に応じてくれました。故郷南相馬の津波被害の惨状を見て、防災や減災のために何かできないか、と思いついたのがロボット開発のきっかけ。実家のタカワ精密に東京から戻り、取り組み始めました。まず水中ロボットのプロジェクトチームに参加し、実践経験を積んだそうです。



学生時代からサッカーのポジションはリベロ。攻守の切り替えのキーマンです。プレーをする中で攻めと守りのバランスを常に意識するようになったそうです。「バランスを大切にすることを人生のキーワードにもしています。ハード、ソフト双方が重要視される現在のロボット開発でも前職のソフトウェア開発の経験が生きています」

今後について、「チャンスがあれば、より使いやすいロボットを多く作り、廃炉作業を少しでも進めたい。南相馬市をロボットの街にしたいです」と語ってくれました。(遊佐和貴)

**浜通りの再生へ「ロボテス」誕生**  
「福島ロボットテストフィールド」は、陸・海・空で活躍するロボットの一大開発拠点です。東日本大震災と原発事故で、被害を受けた浜通りのために、福島イノベーションコーポラティブス構想がつけられました。この構想の中核施設が、ロボットテストフィールドです。インフラや災害現場など実際の使用環境を再現したり、ドローン空港やロボットの性能評価などができます。南相馬市と浪江町に2020年に全面開所しました。世界に例を見ない高度なロボット研究施設だけに、地元企業等との連携がこれからの鍵になります。